

キケロ主義論争と雄弁の衰退

—— エラスムスの「適正」をめぐって ——

山 本 佳 生

The quarrel of Ciceronianism and the decline of eloquence

Yoshio YAMAMOTO

Abstract

We discussed the development of the *Loci Communes*' method in the history of rhetoric. Particularly, our questions were how the method was applied and refined in the realm of rhetoric, and how it came to produce a new reference genre called "Commonplace-Books" with a progress in printing technology and an explosive increase in texts. However, we did not adequately mention the position they took and the role they played in the 16th century. Therefore, it is necessary to clarify the rhetoric and political situation in the latter half of the 16th century when Commonplace-Books became popular. In this paper, we will begin our discussion from the year in which Erasmus published the controversial treatise, *Ciceronianus*. He criticized slavish imitations of the style of Cicero by Italian humanists, and presented a new rhetorical perspective which emphasizes natural "*ingenium*" and "*decorum*" of personality. In the latter half of the 16th century, especially after the 1580s, the epistolary genre, which has been neglected for a long time, is rediscovered as a suitable medium for this period where the ciceronian eloquence was declined. We can see a reflection of the rhetoric of "*ingenium*" that Erasmus claimed in his work in this genre. The change in rhetoric of the second half of the sixteenth century will thus be viewed as a response to the question posed in 1528.

はじめに

一つの技術、あるいは一つの道具の誕生が時代を左右し、人々の考え方や行動様式に大きな影響を与えることがある。たとえば印刷機のように、それによって世界の風景が一変した発明がある。印刷技術の登場の以前と以後では物質的な面のみならず、その時代を生きる人々の精神的、思想的風景も大きな変容を蒙る。特定の技術が定着した後の世代にとって、その存在はもはや必要不可欠であり、生の前提条件といっても差し支えないほど生活に浸透するだろう⁽¹⁾。他方で、ある時代に生きる人々の意識や心性を反映した思想概念、需要から生み出された技術や道具というものも存在する。それらはいわば時代の流れとその変化の証人として、我々が過去について学ぶ際に多くのことを教えてくれる。我々の主題である見出し語付きの引用句集（コンプレイスブック）、そしてそれを作り上げるための方法としての「ロキ・コムーネス」という概念はまさしく後者にあてはまるだろう。というのも、印刷技術の発展によってもたらされた書籍や文書の氾濫、いわばテキスト情報の過多状態にくわえ、偉大な過去の学識を手にしたという人々の欲望、そしてこれ以上の喪失をなんとかしてでも防ぎたいという文献学的情熱、こうした精神的、あるいは知的需要に応える形でルネサンス期のコモン

(1) Cf. E. Eisenstein, *The Printing Press as an Agent of Change*, Cambridge University Press, 1979. またこれに対する Grafton の書評も参照 « The Importance of Being Printed », in *The Journal of Interdisciplinary History*, vol. 11, n° 2, 1980, pp. 265-286.

プレイスブックは誕生し、発展を遂げたからである⁽²⁾。

我々はここまでレトリックの歴史における「ロキ・コムーネス」の方法とコモンプレイスブックの展開について語ってきた⁽³⁾。それらがどのようにレトリックの領域で適用され、洗練され、印刷技術やテキストの増大にともなうコモンプレイスブックという媒体を生み出すに至ったかを主として論じてきたが、ルネサンス期、とくに十六世紀という時代のなかでそれらはどのような位置にあり、どんな役割を果たしたかについては十分に語ったとはいえない。それと同時に考えるべきはコモンプレイスブックを活用する人文主義者たちの活動である。彼らは一体どのような目的のためにそうした知的ツールを活用したのか。

ところで、一口に人文主義者たちとはいっても、実際には十六世紀後半の彼らの活動が主題となる。したがってまずは彼らを取り巻くレトリックを確認することが本稿の課題となるだろう。そして、第二の課題として——これは稿をあらためて論じることになるが——レトリックと政治の関係を問わなくてはならない。というのも、それらは常に緊密な関係性にあるからだ。キケロの雄弁が共和政に強く結びついていたように、十六世紀後半のレトリックもまた政治状況との関連で読み解かれるべきである。そして最終的にはこうしたレトリックと政治の変化のさなかにおけるコモンプレイスブックの隆盛、そして次の世紀の半ばにかけての衰退についての考察を試みられるだろう。

目下のところ、こうした課題を考察するための議論の出発点はどこに置くことができるだろうか。実際の変化が起きるのは1580年代である。だが、それは突発的に起こったわけではなく、1528年のエラスムス『キケロ主義者』を引き金とする、キケロ模倣に関する一連のレトリックの動きのなかに位置付けられる。この著作への反発と後の世代への影響を考えれば、1528年は歴史的ターニングポイントの一つとなるだろう。エラスムスはそれまで人文主義者たちが追い求めてきた価値——それこそルネサンスを特徴づけるものだが——の方向性を転換した。イタリア人文主義者たちのように、過去の栄光について「のみ」語っている場合ではなく、それをどのように自分の本性に適応させるかを問題とするのだ。

1. キケロ主義論争とその射程

『キケロ主義者』の衝撃

1528年3月にエラスムスが発表した『キケロ主義者』は当時のヨーロッパ世界に大きな衝撃をもたらした⁽⁴⁾。盲従的なキケロの文体模倣を批判するというレトリックの問題にとどまらず、それは政治的、思想的な問題をも提起したのだった。基本的にはキケロの散文を最高の手本と仰ぎ、そのみを絶対的なものとして模倣する人々、つまり「キケロ主義者」たちを皮肉り、嘲笑し、その偏執さを批判するのがこの作品の内容であるが、同時代の人々の目にはキケロ自体の権威を貶めているように映ったようだ。いずれにしても、キケロの絶対性とその価値の優位性にあやかってきたイタリアの、とりわけローマの人文主義者たちに向けられたエラ

(2) ルネサンス期に増大したテキスト情報を管理するためのツールとしてコモンプレイスブックが生み出されたことについては次。Ann Blair, *Too much to know. Managing scholarly information before the Modern Age*, New Haven, Yale University Press, 2010.

(3) 拙論「「ロキ・コムーネス」教育とコモンプレイスブックの出現」*WASEDA RILAS JOURNAL*, 早稲田大学総合人文科学研究センター, vol. 10, 2022, pp. 219-230.

(4) 「キケロ主義」についての研究は多くあるが基本的なところを挙げると、I. Scott, *Controversies over the Imitation of Cicero as a Model for Style and Some Phases of Their Influence on the Schools of the Renaissance*, New York, Columbia University, 1910; H. Gmelin, « Das Prinzip der Imitatio in den romanischen Literaturen der Renaissance », in *Romanische Forschungen. Organ für Romanische Sprachen, Volks und Mittellatein*, vol. 46, 1932, pp. 83-360; M. Fumaroli, *L'âge de l'éloquence*, Genève, Droz, 2009 (3^e éd.) [1^{ère} éd., 1980], 1^{er} part., pp. 35-230; G. W. Pigman III, « Versions of Imitation in the Renaissance », in *Renaissance Quarterly* vol. 33, n° 1, 1980, pp. 1-32; J. Chomarat, *Grammaire et rhétorique chez Érasme*, 2 vols, Paris, Les Belles Lettres, 1981, II, pp. 815-840; T. Greene, *The Light in Troy: Imitation and Discovery in Renaissance Poetry*, New Haven, Yale University Press, 1982; K. Meerrhoff, *Rhétorique et poétique au XVI^e siècle en France*, Leiden, Brill, 1986, pp. 25-45; Ch. Mouchel, *Cicéron et Sénèque dans la rhétorique de la Renaissance*, Marburg, Hitzeroth, 1990, 1^{er} part., pp. 42-144; J. Lecointe, *L'ideal et la différence. La perception de la personnalité littéraire à la Renaissance*, Genève, Droz, 1993, ch. 3 et 4, pp. 409-566; M. L. McLaughlin, *Literary Imitation in the Italian Renaissance: The Theory and Practice of Literary Imitation in Italy from Dante to Bembo*, Oxford, Clarendon Press, 1995.

スムスの攻撃は、前年に受けた軍事的なローマ劫略に続いて、彼らに精神的なダメージを与えた⁽⁵⁾。

とはいえ、キケロ模倣の問題は新しいものではない。それは十五世紀終わりのイタリアですでに始まっていた。エラスムスは新たな論点を追加して取り上げたにすぎない。古典テキストの再発見、文献学の発達にともない学識が増大していた時期に、イタリアの人文主義者たちは自分たちのラテン語の文体に意識を向け始めた。有名な例として、パオロ・コルテージはキケロ文体の模倣によって書いた書簡集をポリツィアーノに送り、最高の散文の手本にしたがうことの正当性を示したが、ポリツィアーノの返答はそれを拒否するものだった。「『あなたはキケロを模倣していない』という人がいる。それがどうしたというのだ。私はキケロではない。私が思うに、私は私自身の姿を描いているのだ⁽⁶⁾」。ポリツィアーノにおいて文体とは深遠な学識、幅広い読書、多様な経験によって培われ、形成されていくものを意味する。それゆえ、キケロのみを手本としてその真似をするのではなく、複数の著者の作品を読み、広範な知識を蓄えることで、自分の能力に見合った文体を作り出すことが肝要である。彼は『雑録』のなかで強調しているように「多様性 *varietas*」を重視する⁽⁷⁾。文体模倣にかんしても、多くの著者を熟読し、それぞれの文体から用途に適したものを選び取ることを推奨する。ポリツィアーノがキケロ散文の絶対性に対して多様性を持ちだすことで折衷主義的な模倣を提案しているのに対し、コルテージはそうした折衷主義は文章を寄せ集めるだけであり、真の模倣とはいえないと批判する⁽⁸⁾。

このやりとりからおよそ二十年後、今度はジャンフランチェスコ・ピコとピエトロ・ベンボが再びこの問題を取り上げた⁽⁹⁾。前者の見解はかなり哲学的である。各人の精神にはいわば「アイデア」のようなものがあり、それを養い育てることが必要である。そのためには他人の「アイデア」を模倣することも重要であるが、「アイデア」自体は感覚では把握できず、理性によってのみ理解可能なので、その似姿である言葉が「アイデア」を映し出す。それゆえ多くの作家の言葉を模倣し、そこから自分の「アイデア」を養育するべきであると主張する⁽¹⁰⁾。ピコの論点は複数の著者の模倣にくわえ、文体と精神の一体性を要求するものだ。また、ピコはたった一人の著者を模倣することはそもそも可能なかと問う。というのも、文体は人間の多様な気質を反映したものであり、同一の著者であっても文体が常に同じものとは限らないからだ。また、他人の文章を真似したところで、一語でもその位置を変えれば別物になる。それゆえ、一人の著者のみの模倣は不可能だ⁽¹¹⁾、と結論づける。

これに対していわばイタリア人文主義的エリートの典型であるベンボの返答は現実的だ。模倣というのはすべて事例にもとづいてなされる。ゆえに、もしそうした事例が存在しなければ、模倣すら不可能である。ピコの言う「アイデア」の似姿など今まで目にしたこともない。それよりも、最高の著者、その全体を模倣するべき

(5) 1527年の軍事的なローマ劫略と翌年の『キケロ主義者』の出版がローマの人文主義に大きなダメージを与えたことについては、André Chastel, *Le sac de Rome, 1527*, Paris, Gallimard, 1984, pp. 181-192; E. Macphail, *The Voyage to Rome in French Renaissance Literature*, Stanford, 1990, ch. 1-3, pp. 22-32を参照のこと。

(6) ポリツィアーノとコルテージの書簡は次のものから引用する。*Prosatori latini del Quattrocento a cura di Eugenio Garin*, Milano, Napoli, R. Ricciardi, 1952. p. 902, « Non exprimis, inquit aliquis, Ciceronem. Quid tum? non enim sum Cicero; me tamen, ut opinor, exprimo ».

(7) ポリツィアーノの「多様性」についてはJ. M. Mandosio, « La 'docte variété' chez Ange Politien », in *La varietas à la Renaissance*, op. cit., pp. 33-41. 『雑録』の独創性については、A. Grafton, *Defenders of the Text*, Cambridge, Mass., 1991, pp. 47-75, « The Scholarship of Poliziano and Its Context ».

(8) *Prosatori latini*, p. 910, « illi ipsi, qui se niti dicunt ingenii sui praesidiis et viribus, facere non possunt quin ex aliorum scriptis eruant sensus et inferciant suis, ex quo nascitur maxime vitiosum scribendi genus, cum modo sordidi et inculti, modo splendidi et florentes appareant. » 「みずからの才能の援助と能力をあてにする人々は、必ず他人の著作から表現を掘り出してきて自分の書物に詰め込む。そこから生まれるのはまったくもって欠陥のある文体であり、あるときは汚くだらしない姿で、あるときは壮麗で華やかな姿で現れるのだ。」

(9) この二人のやり取りは次のものから引用。*Le epistole "De imitatione" di Giovanfrancesco Pico della Mirandola e di Pietro Bembo*, ed. G. Santangelo, Florence, Leo S. Olschki, 1954.

(10) *Ibid.*, p. 27, « Ideam igitur ut aliarum virtutum, ita et recte loquendi [natura] subministrat, eiusque pulchritudinis affingit animo simulachrum: ad quod respicientes identidem et aliena iudicemus et nostra. » 「(自然は) 他の徳のアイデア同様、正しく話す術のアイデアをも与え、精神のうちにその美しさの似姿を備え付ける。我々はこの似姿にたえず目を見張りつつ、他人のものとの自分のものとを判断するのだ。」

(11) *Ibid.*, p. 37 sqq.

である⁽¹²⁾。というのも、模倣とは著述全体を包含することであり、複数の著者の部分を真似することは注意力が散漫になる恐れがあるからだ。さらに文体というものは、美質と欠点などのあらゆる部分の総合から成り立っているので、複数の著者を参照することはできない。たとえそれが可能だとしても、そこから生まれるのは首尾一貫性のない、矛盾した文体であろう。それゆえ、あらゆる凡庸な作家の美点を含んでいる最高の作家、つまりキケロを模倣し、いずれは肩を並べ、最後に追い越すように努めるべきなのだ、と主張する⁽¹³⁾。

この二人の議論は、単なる読書と執筆の方法論の延長であったポリツィアーノとコルテージのやり取りに、より哲学的な色合いを付加し、論点を深めたようにみえる。ベンボの理想主義的な見解は古代ローマの栄光と遺産の継承者を自認する教皇庁の人文主義者たちにとっては非常に受け入れやすいものだっただろう。しかしながら、その文化的、歴史的優越感こそが北方人を苛立たせたのだった。

エラスムスの問題提起

エラスムスやメランヒトンが代表する北方ルネサンスの特徴は実際性にある。ラテン語を単なる飾りとしてではなく、生きた言葉としていかに効率よく学び使いこなすかという教育が重視され、そのための方法論が編み出された。ラテン語の実際の使用に力点を置く時点で、北方のユマニストたちが古代の規範と権威を遵守することを目的としているイタリアの人文主義者たちとは相容れないのは明白である⁽¹⁴⁾。エラスムスの『キケロ主義者』はそうした保守性を嘲笑しつつ、その実態は墮落したものであることを暴露した⁽¹⁵⁾。この作品の構成や詳しい論点についてここでは述べないが⁽¹⁶⁾、エラスムスが一貫して問題とし⁽¹⁷⁾、批判をくわえたのは「適正 *aptum/decorum*⁽¹⁸⁾」についてであり、それは歴史、宗教、そして人格と関係する。

まず歴史的適正について⁽¹⁹⁾。キケロが生きたのは千年も前のことであり、その言葉づかいを用いて現在の事

(12) *Ibid.*, p. 45, « *Imitatio autem quia in exemplo tota versatur, ab exemplo petenda est : id si desit, iam imitatio esse ulla qui potest ?* » 「模倣はすべて実例にかかわるものなので、(似姿ではなく) 実例から求めなくてはならない。もしそれがないとしたら、いかにして模倣が可能だろうか」; p. 46, « *Imitatio autem totam complectitur scriptiois alicuius formam, singulas eius partes assequi postulat : in universa stili structura atque corpore versatur.* » 「模倣とはある著作の形態すべてを含むものであり、それぞれの部分を検討することを要求する。つまり、文章の構造と形状の全体にかかわるものだ」。

(13) *Ibid.*, p. 56-57, « *primum, ut qui sit omnium optimus, eum nobis imitandum proponamus : deinde sic imitemur, ut assequi fuerimus, etiam prætereamus.* » 「第一にすべてにおいて最良の模範を我々の前に置き、それを模倣し、肩を並べたなら、さらにそれを追い越さなくてはならない」。

(14) 北方の人文主義者たちとイタリア人文主義者たちのラテン語に対する態度の差異については、J. C. Scaliger, *Orationes duæ contra Erasmum : Oratio pro. M. Tullio Cicerone contra Des. Erasmum (1531) et Adversus Des. Erasmi Roterod. Dialogum Ciceronianum Oratio secunda (1537)*, textes présentés, établis, traduits et annotés par Michel Magnien, Préface de Jaques Chomarat, Genève, Droz, 1999 の « Introduction à l'Oratio prima », p. 24, n. 48 における校訂者 M. Magnien の詳細な説明を参照のこと。

(15) 正式なタイトルは *Dialogus cui titulus, Ciceronianus sive, De optimo genere dicendi*。『キケロ主義者』のテキストは次の二つを参照し、引用する際はそれぞれのページ数と行数を明記する。「Dialogus Ciceronianus», in *Opera omnia Desiderii Erasmi Roterodami : recognita et adnotatione critica instructa notisque illustrata*, Amsterdam, 1971, I-2, pp. 581-710, éd. P. Mesnard (以下 ASD と略す); *Il Ciceroniano o dello stile migliore, esto latino critico, traduzione italiana, prefazione, introduzione e note a cura di Angiolo Gambaro*, Brescia, La Scuola, 1965. (以下 Gambaro と略す)。この作品は (i) 1528 年 3 月の初版, (ii) 1529 年 3 月の第二版, (iii) 1529 年 10 月の第三版, (iv) 1530 年 3 月の第四版, すべてフローベン書店から出版されている。ASD は (i) のテキストの再現を肯定方針としている (Introduction, p. 585)。他方 Gambaro は (iii), (iv) の読みを主として選択している。なお ASD は誤植があり、それを指摘しているのが、J. Ijsewijn, « Castigationes Erasminæ », in *Humanistica Lovaniensia*, vol. 27, 1978, pp. 302-304.

(16) Cf. J. Chomarat, *op. cit.*, pp. 818-819; E. V. Telle, « Erasmus's *Ciceronianus* : A Comical Colloquy », in *Essays on the Works of Erasmus*, éd. R. Demolen, New York, London, Yale U. P., 1978, pp. 211-220.

(17) 1528 年以前の書簡のやりとりすでに『キケロ主義者』の論点が見られる。Ex. *Opus Epistolarum Des. Erasmi Roterodami*, ed., P. S. Allen, H. M. Allen and H. W. Garrod, Oxford, 1906-1956, (以下 Allen と略す), VI, n° 1706, à Andreas Alciati, le 6 mai, 1526; VII, n° 1805, à John Maldonat, le 30 mars, 1527; VII, n° 1885, à F. Vergara, le 13 octobre, 1527. 特に最後のものは重要。

(18) 伝統的な「適正」については、Cicéron, *De ora.*, III, 120; *id.*, *Orator*, 70-74; *id.*, *De off.*, I, 96-114; Quint., *Inst. Ora.*, XI, 1; Horace, *De Arte Poetica liber*, v. 38-41. こうした「適正」は文章や表現が時や場所、状況にふさわしいかを問う修辞学的なものであるが、エラスムスがこれを人格に関係する倫理的次元へと格上げした。これについては次の書が詳しい。Kathy Eden, *The Renaissance Rediscovery of Intimacy*, University of Chicago Press, 2012.

柄について語るのは不適當であり、時代錯誤ではないのか⁽²⁰⁾。次に宗教的な適正。キケロはキリストが生まれる以前の人間であり、当然ながらキリスト教について語っているわけではない。にもかかわらず彼の文体や語彙でキリスト教の事柄について話すのは、キリスト教徒として相応しくないばかりか、むしろ異教趣味ではないのか⁽²¹⁾。最後に人格的適正。各人にはそれぞれ本性というものが備わっている。また文体はその本性のあらわれでもある。したがって、他人の文体を模倣し、さらにはその本性までも真似ようとするならば、それは自分の本性を蔑ろにすることと同じではないのか⁽²²⁾。我々は自分の本性に適した文体を創出することが肝要であり、そのためにはキケロのみならず、あらゆる最良の作家を参考にし、模倣することが必要なのだ。なぜなら、「新たなキケロを生みだすことはできても、キケロになることはできない⁽²³⁾」のだから。

実のところ、エラスムスが呈示したこうした「適正」の問題は同時代人たちにはそれほど響かなかったようだ。それよりも当時の人文主義者たちにとっては、キケロという最高の模範をエラスムスが貶めているという点の方が重大であった。『キケロ主義者』に対する反応として、エラスムスの旧友であるカメラリウスのものが一番早く、メランヒトンはその宗教上の配慮から、エラスムスの死後になってはじめてこの作品への言及を公開した。イタリアからは、ジュリオ・カミッロが1529年から翌年にかけてフランソワ一世の宮廷に滞在中に、ラテン語ではなく俗語で模倣について論じた。そこでカミッロは理想的な模倣対象の必要性を訴え、それを目指すことで自身の凡庸な能力を引き上げることを主張した。これから取り上げるスカリゲルやドレによる苛烈な反論とは異なり、カミッロのそれはエラスムス個人を攻撃しないという慎みと尊敬を保ったものであった⁽²⁴⁾。

スカリゲル：タイミングの悪い男

ユリウス・カエサル・スカリゲル、この医学の才に恵まれたイタリア出身の人文主義者は、『キケロ主義者』が発表された頃はすでにフランスのアジャンに腰を落ち着けていた⁽²⁵⁾。ギリシャ文化に対するラテン文化の優位性を信じて疑わないスカリゲルにとって、ラテン語の最高の手本、いわば規範でもあるキケロの価値が、エラスムスによって貶められていると見て取るや、即座に筆を執り、1529年の12月にはすでにその反論文を書き上げていた。彼はそれをパリに送り、同時にパリ大学の主要な寮の学生たちの同意を取り付けようと手紙を書き送るなどしたが、あまり効果も期待できなかつたうえに、出版自体先延ばしになり、ただ時間だけが過ぎ

(19) G. W. Pigman III, « Imitation and the Renaissance sense of the past : the reception of Erasmus' *Ciceronianus* », in *The Journal of Medieval and Renaissance Studies* vol. 9, n° 2, Fall 1979, pp. 155-177.

(20) ASD, 636, 22-25; Gambaro, 126, 1699-1703, « *Uidetur praesens seculi status, cum eorum temporum ratione congruere, quibus uixit ac dixit Cicero, quum sint in diuersum mutata religio, imperium, magistratus, respublica, leges, mores, studia, ipsa hominum facies, denique quid non ?* » 「今世紀の現在の状況がキケロが生き、語っていた時代のそれと一致するというのか。宗教も、政体も、権力者も、国家、法、慣習、目的、まさしく人間の見かけがすっかり変わってしまっているというのに。」

(21) ASD, 647, 20-21; Gambaro, 162, 2270-71, « *Paganitatem profiteri non audemus, Ciceroniani cognomen obtendimus.* » 「異教崇拜を公言する勇気が我々にはないので、キケロ主義者という呼称を口実に使っている」

(22) ASD, 704, 10-12; Gambaro, 290, 4197-4200, « *Habet animus faciem quandam suam in oratione velut in speculo relucentem, quam a nativa specie in diuersum refingere, quid aliud est, quam in publicum venire personatum ?* » 「鏡のなかに顔が見えるように、魂も言論のうちに自分の顔をあらわす。生まれついた性質を別のものに変えるのは、公的な場に仮面を被って現れるのと、なにが違うというのか」。

(23) ASD, 632, 1-2; Gambaro, 108, 1440-41, « *Cicero nasci fortassis potest aliquis, fieri nemo.* »

(24) J. C. Scaliger, *éd. cit.*, pp. 29-30 et p. 30, n. 80.

(25) スカリゲル全体については、Vernon Hall, « Life of Julius Caesar Scaliger (1484-1558) », in *Transactions of the American Philological Society*, vol. 40, n° 2, 1950, pp. 85-170; J. De Bourrousse de Laffore, « Jules-César Lescaie (Scaliger) : étude biographique », in *Recueil des travaux de la société d'agriculture, sciences et arts d'Agen*, 1861 (SER2,T1,PART1), pp. 24-69; M. Magnien, « Introduction à l'*Oratio prima* », dans *Orationes duae contra Erasmum*, *éd. cit.*, pp. 35-54; *id.*, « Scaliger J.-C. (1484-1558) », in *Centuria latinae. Cent une figures humanistes de la Renaissance aux Lumières offertes à Jacques Chomarat*, éd. C. Nativel, Genève, Droz, 1997, pp. 731-737. スカリゲルとエラスムスについては *id.*, « Scaliger et Érasme », in *Acta Conventus Neolatini Sanctandreami*, éd. I. D. MacFarlane, Binghamton, New York, 1986, pp. 253-261; Ch. Bénévent, « Singes et fils de Cicéron (Érasme et Scaliger) », in *Nouvelle Revue de XVI^e siècle*, vol. 19, n° 2, 2001, pp. 5-23.

ていった。やっと1531年になって出版されることになるが、残念ながら誤植などが多い、質の低いものだった²⁶⁾。そのような不遇の論文においてスカリゲルがエラスムスへ向けて放った批判の矢のすべてを取り上げることはできないが、その要点だけ少し見ていこう。

『キケロ主義者』のなかでエラスムスは、どんな文体にも欠点があり、すべてにおいて完璧なものなど存在しないと主張した。スカリゲルにとってはそれこそ認められないものだった。よく磨き上げられ、主題と調和した完璧な文体というものは存在する。それはキケロのものと著しく近似する²⁷⁾。つまりキケロの文体こそが完璧なのだ。そしてそのキケロにはあらゆる完全性が含まれているので、たとえ時代が異なり、発音や音律が異なっても、キケロだけは模倣することができるだろう²⁸⁾。また、模倣の対象を複数にすれば、その文体の多様さのなかで判断停止に落ち込み、最終的に挫折することになるだろう²⁹⁾。それよりも理想とする模範に近づけるよう努力し、張り合い、最後にはそれを乗り越えられるようにすることで単なる模倣者ではなく、真の作家となれるのだ、とスカリゲルは主張する。エラスムスはそうした努力よりも「天性 *ingenium*」を重視し、それに適合した言論を生み出すことでキケロのそれを乗り越えようとしているが、一体どうして到達できていないもの乗り越えられようか³⁰⁾。また、新たなキケロを生み出すことができても、誰もそれになることはできないとエラスムスは言うが、キケロは生まれたときから偉大であったわけではなく、あとからそのようになったのだ。キケロは本性的に才能の芽があったからそうなったにすぎない。それゆえ、キケロと同じような才能に恵まれた者はもう一人のキケロになれるだろう³¹⁾。このようにスカリゲルは『キケロ主義者』の主たる論点を反駁しつつ、みずからの理想主義的な主張を行なう。それ以外にもエラスムスへの個人攻撃や宗教的疑惑を述べ、徹底的な反論をおこなう。しかしこの論文は見事にエラスムスに黙殺されてしまう。もしエラスムスが返答をしていたら、それだけで、地方の一人文主義者にすぎないスカリゲルの名声は高まったであろうが、それは叶わなかった。

というのも、エラスムスはスカリゲルのことなど知らなかったし、この論文が出版されてからも、ラブレールが教えてくれるまで「ユリウス・カエサル・スカリゲル」というペンネームを使って別の人間が書いたのだと信じていたからだ³²⁾。そんなこととはつゆ知らず他方のスカリゲルは、あまりに反応がないのに業を煮やし、新たな論文に着手する。エラスムスは雄弁の父であるキケロを殺した大罪人であり³³⁾、嘘つきで吝嗇、傲慢で野蛮な人間だ、とスカリゲルは悪罵を並べたてる。さらに自分の論文が黙殺されていることについては都合よく、エラスムスが黙っているのは反論できないと判断したからであり、唯一自分だけがあの尊大な男を黙らすことができたのだ³⁴⁾、と考えている。ところが、この二つ目の論文も出版までの紆余曲折があり、最終的に出版されたのはエラスムスの死後、1537年のことである。結局一度もエラスムスからの直接の反応を引き出せ

26) M. Magnien, « Un humaniste face aux problèmes d'édition. J.-C. Scaliger et les imprimeurs », in *BHR*, t. XLIV, n° 2, 1982, pp. 309-313 ; *id.*, « Introduction à l'*Oratio prima* », *loc. cit.*, pp. 74-82.

27) Scaliger, *éd. cit.*, p. 124, l. 1179-86.

28) *Ibid.*, p. 111, l. 707-720 et note 163. エラスムスは『キケロ主義者』と一緒に『ラテン語とギリシャ語の正しい発音について *Recta Latini Graecique sermonis pronuntiatione*』を出版している。あまり注目されないが、エラスムスがキケロ模倣の不可能性を指摘する根底には、こうしたラテン語の発音や韻律がキケロのそれとはすでに異なってしまうという認識がある。この点を考察したのが K. Meerhoff, *op. cit.*, pp. 29-30 et p. 148, n. 19. またエラスムスのこの技術的で教育的な作品については A. Renaudet, « Érasme et la prononciation des langues antiques », in *BHR*, t. XVIII, n° 2, 1956, pp. 190-196.

29) Scaliger, *éd. cit.*, p. 148, l. 2048-2058.

30) *Ibid.*, p. 139, l. 1743-48. En part., l. 47-48, « *qua ratione superabunt aemulando, quem imitando aequari posse negas ?* » 「一体どのようにして、模倣によって並び立つことができないと君（エラスムス）が主張する人間（キケロ）を競争心によって乗り越えられるというのか」。

31) *Ibid.*, p. 134, l. 1546-50. « *Nam quemadmodum ille non statim natus est tantus, quantus postea fuit, sed factus est. Ita autem factus est, ut a natura ingenii semina adeptus sit : eodem quoque pacto quis, postquam ita natus sit, talis quoque fieri potest.* »

32) Magnien, *art. cit.*, p. 311 et n. 24, « Le Rotterdamois ne croit pas à l'existence de Scaliger et voit dans ce pamphlet la main de Jérôme Aléandre. » ; *id.*, « Introduction à l'*Oratio secunda* », dans Scaliger, *éd. cit.*, pp. 231-232. ラブレールの手紙は Allen, X, n° 2743, le 30 nov. 1532.

33) Scaliger, *éd. cit.*, pp. 332-333, l. 2859-71.

34) *Ibid.*, p. 336, l. 2999-3001.

ないまま、ましてやこの偉大な人文主義者のライバルにすらなれないまま、スカリゲルの二つの論文はしばし忘却の淵をさまようことになる³⁵⁾。

エチエンヌ・ドレ：ノソポヌスの代理人

スカリゲルが二つ目の論文を書き上げパリに送付した1535年、エチエンヌ・ドレが『キケロ主義者』への反論となる作品を出版した³⁶⁾。これは対話形式をなしており、登場するのはドレの師であるシモン・ド・ヌフヴィル Simon de Neufville とエラスムスの親友トマス・モア Thomas More である。モアの台詞はすべて『キケロ主義者』からの引用で成り立っていることから、いわばこの虚構的対話はドレとエラスムスの代理戦争といえるだろう。ドレはこの作品のなかで三つの論点を示す。まず、エラスムスはその作品のなかで、ノソポヌスという病的なキケロ主義者を描き、嘲笑したが、そのモデルとされるクリストフ・ド・ロングイユ Christoph de Longueil の名誉を回復すること。次にキケロ主義の弁護。最後にキケロの人物自体の擁護である。

ロングイユはパリで学問を修め、初めはイタリアの人文主義に批判的であったが、ベンボと出会う「改宗」し、イタリア人たちから「キケロ主義者」として認められ、ついには栄えある「ローマ市民」に推挙された、いわばフランス人文主義のエリート的存在であった。しかし、かつてパリ時代に行なったイタリアを貶める演説が発見されてしまい、ローマから逃亡、パドヴァの地で34歳の若さで夭折した。パドヴァ大学でレトリックの教授の地位をロングイユの後に引き継いだのが、ドレの師であるヌフヴィルである。このことから、ドレがこの人物の名誉回復に努めるのも理解できるであろう。また、キケロ主義者たちの文体模倣を弁護するにあたってドレが要求するのは、哲学や宗教と文学的技術を区別することである。エラスムスは精神に宿る本性と言論の強い結びつきを訴えるが、ドレはその関係性を断ち切り、レトリックの能力と人間の有徳性は別のものであると主張する。深い学識と雄弁（これはキケロ以来の組み合わせである）はたえまない習練によって獲得されるものであり、そのために最高の手本であるキケロを模倣すべきなのだ。レトリックは社会形成のための道具であり、普遍的な人間性がそこでは有用である。エラスムスの言うような個人的な本性やキリスト教の真実はここでは無関係である。このようにレトリックと神学、哲学の領域を峻別することで、キケロ模倣の正当性を確保し、さらにはエラスムスが聖なる事柄を俗な仕方語っていることを批判し、その混合主義を非難する。だが、ドレに反論することなく1536年7月12日にエラスムスは没する。スカリゲル同様、ドレもこの人文主義の王者に対して一方的に批判を投げかけただけで終わってしまう。

模倣セオリー再考

ここまでの議論を振り返れば、スカリゲルの論点は結局のところキケロとラテン語の権威を守ることにあった³⁷⁾。ドレのそれもまた、キケロ主義的模倣を正当化するというものにほかならなかった。この二人が模倣の問題を、どちらかといえば文章や言葉づかいといった技巧的な側面に近いところで捉えていたのに対し、エラスムスは歴史、哲学、神学といった観点から捉え、唯一の模範を真似することの限界を指摘したのだった。実際のところ、エラスムスの主張は目新しいものではない。むしろ新しいのはそのアプローチの仕方であろう。

³⁵⁾ 1620年にトゥールーズ高等法院の Jacques de Maussac がスカリゲルの書簡とこの反論文を出版し、アンリ四世とその取り巻きであるナヴァール勢によって宮廷のレトリックが墮落させられたと訴え、キケロの文体への回帰を説いた。M. Fumaroli, *op. cit.*, pp. 524-529.

³⁶⁾ ドレのこの作品は次を参照。L'Erasmianus sive Ciceronianus d'E. Dolet (1535). Introduction – Fac-similé de l'éd. originale du de Imitatione Ciceroniana – Commentaires et appendices, éd. E. V. Telle, Genève, Droz, 1979. その詳細な解説も参照のこと。ch. 1, pp. 16-45; ch. 2, 46-91. ドレとエラスムスについては Fumaroli, *op. cit.*, pp. 110-115; Chomarat, « Dolet et Érasme », in Étienne Dolet (1509-1546), Paris, PENS, Cahier V.-L. Saulnier n° 3, 1986, pp. 21-36; K. Lloyd-Jones, « Une étoffe bigarrée... Dolet critique du style érasmien », in Acta Conventus Neo-Latini Torontonensis, éd. A. Dalzell et alii, Binghamton, MRTS, 1991, pp. 439-447; *id.*, « Erasmus and Dolet on the Ethics Imitation and the Hermeneutic Imperative », in International Journal of the Classical Tradition, summer, 1995, vol. 2, n° 1, pp. 27-43. ドレとスカリゲルについては M. Magnien, « Scaliger et Dolet », in Étienne Dolet (1509-1546), *op. cit.*, pp. 37-50.

³⁷⁾ Cf. Ch. Brousseau-Beuermann, « Le renouvellement de l'esprit par l'Adage », in BHR, tome XLVII, 1985, n° 2, p. 345.

キケロ主義者たちがおこなっているのは「措辞 *elocutio*」に注力した模倣である。それに対してポリツィアーノやジャンフランチェスコ・ピコ、そしてエラスムスは「発想 *inventio*」に力点を置いている。つまり、言論の源は各人の精神にあるのだから、そこから発出するものにキケロの装いを着せるのは間違いだというわけだ。これを別の関係性で言えば、キケロ主義者たちは「言葉 *verba*」を重要視し、他方は「事柄 *res*」に優位性を置く、ということになるだろう。ところで、エラスムスは人格的適正の観点から「発想」と「措辞」の一致を求める。

「人格」のレトリック

各人が精神のうちに持っている「天性」を言論の発想源とするならば、当然措辞もそれに見合うものでなくてはならない。それゆえキケロという単一の著者ではなく、彼も含んだ多くの著者の優れた部分を看取り、参考にしながら自分固有の文体を作り上げるべきで、その際言論は精神の「鏡」となるだろう。もしそうでないならその「鏡」は偽りのものだ、とエラスムスは言う。

Vt ne repetam, quod ipsa quoque natura repugnat isti affectationi, quae voluit orationem esse speculum animi. Porro quum tanta sit ingeniorum dissimilitudo, quanta vix est formatum, aut vocum, mendax erit speculum, nisi nativam mentis imaginem referat [...]. (ASD, 703; Gambaro, 286, 4158-62. 強調は引用者)

みずからの本性がその目指すところと対立するままにしてはいけぬ。本性は言論が魂の鏡であることを望んでいる。体型や声が異なるよりもはるかに人間の天性というものは各々異なるものであり、もし鏡が心に生じた像を映さなければ、それは偽りのものとなる。

この「鏡」のメタファーが表しているのは、人格に対する「適正 *aptum/decorum*」にほかならない。J. Lecointe が指摘するように³⁸⁾、これは 1518 年の『学習の方法について *De ratione instituendi*』から晩年の『伝道者 *Ecclesiastes*』に至るまで通底する思想であり、とりわけ『リングア』³⁹⁾や『伝道者』においてはキリスト教徒としての言論の適正について語られている。キリスト教徒たちの言論の墮落を論じた前者では、言葉を偽ったり、正しい仕方を使わないことは、神に対する信仰心を損なうことだと指摘される。なぜなら、言論と精神の結びつきは、神とキリストとの不可分の関係と同じくらい真実だからだ⁴⁰⁾。また、キリスト教の真実とレトリックの技巧や洗練を両立させることを目指した後者の著作においても、言葉と精神の関係性が強調されている⁴¹⁾。「言論は魂の鏡 *oratio speculum animi*⁴²⁾」として表すことのできるこの考えは、言論の真実性を保証する。このようにエラスムスはレトリックを単なる技巧ではなく、書き手の心の発露と関連付けて示した。スカリゲルにせよ、ドレにせよ、このレトリックに理解を示すことはなかった。彼らの後に出てくるモンテー

38) Lecointe, *op. cit.*, pp. 436-441.

39) 『リングア *Lingua*』についての研究は M. M. Philips, « Erasmus on the Tongue », in *Erasmus of Rotterdam Society Yearbook* (以下 *ERSY* と略す) 1, 1981, pp. 113-125 ; L. Carrington, « Erasmus' *Lingua* : The Double-Edged Togue », in *ERSY* 9, 1989, pp. 106-119 ; J. Chomarat, *op. cit.*, t. I, pp. 39-42.

40) *Lingua*, in ASD IV-1A, p. 93, « *Quod in rebus diuinis est Pater ex se progignens Filium, hoc in nobis est mens, fons cogitationum ac sermonis ; quod illic est Filius nascens a Patre, hoc in nobis est oratio profiscens ab animo. Filius dictus est imago Patris, adeo similis, vt qui alterutrum norit vtrunque norit ; et in nobis animi speculum est oratio [...].* » 「聖なる事柄において、父なる神が彼自身からその息子を生み出したように、我々においても精神は思考と言論の源である。神の子は神の似像と言われ、それゆえ片方を知る人は両方を知ることになるのだ。そして我々においても言論は魂の鏡である。」(強調引用者。以下同様)

41) *Ecclesiastes*, ASD V-4, p. 40, « *Mens fons est, sermo imago a fonte promanans. Quemadmodum autem vnicum illud Dei Verbum imago est Patris, adeo nulla ex parte promenti dissimilis, vt eiusdem sit cum illo indiuiduaeque naturae, ita humanae mentis imago quaedam est oratio [...].* » 「精神は源泉であり、言説はそこから流れ出る像である。ところで、唯一なる神の御言葉が父なる神の像であるのと全く同様に、言説もその作り手と同一で不可分の本性を分け持つのである。ゆえに、言説は一種の人間の精神の像である」。また M. Hoffmann, *Rhetoric and Theology : The Hermeneutic of Erasmus*, University of Toronto Press, 1994 ; J. M. Weiss, « *Ecclesiastes and Erasmus : The Mirror and the Image* », in *Archiv für Reformationsgeschichte*, Jahrgang 65, 1974, pp. 83-108 も参照のこと。

ニュ⁽⁴³⁾やリプシウスらが、書き手の本性と言論の一致を実践し、このレトリックを確立していくことになる。

2. 反キケロと新たな模範の探求

反=雄弁の時代

ところで、キケロという絶対的な規範の権威が多少は揺らいだものの、依然としてその模倣は支持されており、ラテン語教育においては必要不可欠なものであった。しかし、キケロ散文の冗長さに嫌悪感をあらわし、彼が体現している雄弁というものの価値を評価しない動きが一部の人々のあいだで起きる。日々増え続ける知識に疲れ、現実の政治には幻滅し、憂鬱に取りつかれた世代。彼らは多かれ少なかれ最良の教育を受け、古典に精通しているものの、それに比肩しようという野心や、その黄金時代を自分たちの土壌で実現しようといった情熱などはなく、むしろそうした意気込み、あるいは思い上がりこそが混乱と無秩序を生み出していると疑っている。いうまでもなく彼らの代表者はモンテーニュであり、ベーコンであり、リプシウスであるが、彼らの反キケロ主義、というより正確には反=雄弁の姿勢は1580年代から次第に見られるようになるだろう。モンテーニュは彼の『エッセー』の言葉の空虚さについて論じた章のなかで次のように言う。「レトリックは規律のない群衆を操作し、扇動するために考え出された道具であり、医薬と同じように病んだ国家にだけ用いられる」。「そしてたえず動乱の嵐が吹きすさんでいた国家には雄弁家たちが続々と流れこんだ⁽⁴⁴⁾」。つまりモンテーニュにとって雄弁は国家の混乱と腐敗の兆候にほかならない。またキケロについて考察した章においても、キケロと小プリニウスをエピクロスとセネカに比較しながら、前者の二人がいかに関心を持って自分の名誉に固執したかを嘆き、最高の官職にある人間が美しい言葉を綴ることに心を砕くのは、はたして相応しいことなのかと問う。エラスムスはキケロ主義者たちを批判し、皮肉のために適正という概念を持ち出したが、モンテーニュはキケロ自身の適正をも問題とする。「我々に雄弁だけを渴望させ、内容を渴望させない雄弁なんか糞くらえ。もっとも『キケロの雄弁は完成の域に達しているからそれだけでも内容がある』というのなら別の話であるが⁽⁴⁵⁾」。モンテーニュもまた「キケロ主義者」たちの主張を皮肉りながら、雄弁と美しい措辞がいかに関心を持って見つめられないものであるかを示す。

このような雰囲気を変えてくれたのがその頃すでにローマで確固たる地位に就いていたミュレ Marc Antoine Muret である⁽⁴⁶⁾。1580年から1585年にかけて講義の題材にタキトゥスやセネカを選んだこの人文主

(42) 関連する格言は次の二つ。Érasme de Rotterdam, *Les Adages*, sous la direction de Jean-Christophe Saladin, Paris, Les Belles Lettres, 2013, « 550. *Qualis vir, talis oratio* »; « 98. *Stultus stulta loquitur* ». また, A. Wesseling, « Dutch proverbs and ancient sources in Erasmus's *Praise of Folly* », in *Renaissance Quarterly*, vol. 47, n. 2, 1994, pp. 369-372; R. Kilpatrick, « 'Clouds on a wall'. The Mirror of Speech in the *Adagiorum Chiliades* and the *Moriae encomium* », in *ERSY* 33, 2013, pp. 55-74; Wolfgang G. Müller, « Der Brief als Spiegel der Seele : zur Geschichte eines Topos der Epistolartheorie von der Antike bis zu Samuel Richardson », in *Antike und Abendland*, 1980, t. 26 pp. 138-157; Karl A. Neuhausen, « Der Brief als 'Spiegel der Seele' bei Erasmus », in *Wolfenbütteler Renaissance Mitteilungen*, t. X, 1986, pp. 97-110 も参照のこと。

(43) モンテーニュにおける「言論は魂の鏡」については, M. Magnien, « Montaigne et Érasme : Bilan et Perspectives », in *Montaigne and the Low Countries (1580-1700)*, edited by P. J. Smith, Brill, 2014, pp. 25-26; *id.*, « Érasme », in *Dictionnaire de Michel de Montaigne*, éd. Ph. Desan, Paris, H. Champion, 2004, p. 337; *id.*, « Un écho de la querelle cicéronienne à la fin du XVIe siècle : éloquence et imitation dans les *Essais* », in *Rhétorique de Montaigne*, Actes du colloque de Paris, réunis par Frank Lestringant, Paris, Champion, 1985, pp. 89-90. また, G. Defaux, « Rhétorique et représentation dans les *Essais* : de la peinture de l'autre à la peinture du moi », in *Rhétorique de Montaigne, op. cit.*, pp. 21-48; T. Cave, *The cornucopian Text. Problems of writing in the French Renaissance*, Oxford, Clarendon Press, 1979, p. 278. において指摘されている。

(44) *Les Essais*, texte établi et annoté par Jean Balsamo, Michel Magnien et Catherine Magnien-Simonin, 1 vol., "Bibliothèque de la Pléiade", Paris, Gallimard, 2007, I. 51. 325, « C'est un util inventé pour manier et agiter une tourbe, et une commune desreiglée : et est util qui ne s'employe qu'aux estats malades, comme la medecine. » ; « et où les choses ont esté en perpetuelle tempeste, là ont afflué les orateurs. »

(45) *Ibid.*, I. 39. 256, « Fy de l'éloquence qui nous laisse envie de soy, non des choses : Si ce n'est qu'on die que celle de Cicero, estant en si extreme perfection, se donne corps elle mesme. » モンテーニュが一般的なレトリックの「配置」を採用しないことによって反キケロの姿勢を示していることについては次の論文が詳しい。E. M. Duval, « Rhetorical Composition and "Open Form" in Montaigne's Early *Essais* », in *BHR*, t. XLIII, n° 2, 1981, pp. 269-287.

義者は、1580年の講義のはじめに行なう演説で、ローマ帝政期と現状の類似を指摘し、新たな政治体制に必要なのは雄弁ではなく別のジャンルであるとして、キケロの書簡集を取り上げた。さらに1582年の演説では、いまや弁論における雄弁が力を持ったキケロ的な黄金時代は終わり、いわば思慮をそなえた雄弁、つまり書簡が新たに求められるジャンルとなると主張する。書簡によって弁論家は君主と友愛を結び、国家的最重要事を任せられ、信頼と名誉を得ることができるのだ⁽⁴⁷⁾。このミュレの展望はその世紀の終わりから次の世紀のはじめにまで展開していくことになる。だが、その展開を下支えしているのはやはり1528年にエラスムスが呈示したレトリックなのだ。

人格的適正と書簡

いままでの口頭での弁論に取って代わるものとしてミュレが呈示した書簡というジャンルは、もちろん我々もよく知るように古代から人々のあいだで交わされてきたものであり、そのうちのいくつかは優れた作品として読み継がれてきた。しかし、それでもなおレトリック体系のなかで真剣に取り上げられることはなく、会話の延長程度の認識でしかなかった。他方、中世イタリアにおいては王侯貴族に仕える職業的秘書たちが様々な公的文書を作成する際に役立つ手引書を用いていた。これは外交や儀式における公的書簡に必要な挨拶文、好意を得るための陳述、要点をまとめるための結論などの見本となる定型文を集めたものであり、書記官たちはその手本を忠実に模倣し、文章を作成していた⁽⁴⁸⁾。はじめは基本的な散文の指南書であったそれも、次第に相手をよろこばせるための壮麗で華美な文章の用例集となる。イタリアルネサンスを牽引した人文主義者たちの多くはこうした貴族や教皇庁付きの書記官であり、定型表現を熟知し、使いこなしていたエリートたちであった。そこにキケロという最高の手本が適用されるのは当然のことだといえる。高位聖職者としてレオ十世に仕えたピエトロ・ベンボやヤコボ・サドレートなどの人文主義者がキケロの散文に忠実であろうとするのは、こうした職業的必要性もあるにちがいない。形式的でありながら、見事で美しい文章を書く必要が彼らにはあった。それゆえ、彼らにとっての「適正」は時、場所、状況といった伝統的なものであり、職業的な縛りも何もないエラスムスが主張する「人格」、つまり書き手の「天性」の適正は考慮されることはない。

他方、書簡を公的なものではなく、私的なものとして認識したのはペトラルカである。書簡は個人的で親密なやり取りにうってつけだと再評価し、そこには相手の感情や考えが現れていると言い、いわば相手の姿をそこに読み取ることができるジャンルとして位置付けた⁽⁴⁹⁾。この考えの延長線上にエラスムスがいる。1522年フローベン書店から『手紙の書き方について』を出版し、そこで書簡の再定義をおこなう。彼が前面に押し出すのは「多様さ」の価値である。主題、文体、書き手の天性、すべてが異なり、その数は限りないが、書簡は柔軟にそれぞれに対応し、書き手は「適切に語る *apte dicere*」ことができる。この観点は盲従的なキケロ模倣と定型表現で塗り固められた書簡に自由をもたらした。だが、エラスムス自身はまだ書簡を弁論の延長としてしかとらえておらず、一つのジャンルとして確立するには至らない⁽⁵⁰⁾。

実際の変化は1580年代に起きる。ミュレの高弟でもあるユストゥス・リプシウスは1586年の『書簡選集』

(46) ミュレについては E. Macphail, *op. cit.*, pp. 120-160 ; Fumaroli, *op. cit.*, pp. 162-175 ; R. Trinquet, « Recherches chronologiques sur la jeunesse de Marc-Amtoine Muret », in *BHR*, t. XXVII, n° 2, 1965, pp. 272-286.

(47) *Opera Omnia*, éd. C.-H. Frotscher, Leipzig, 1848, t. 1, Genève, Slatkine Reprints, 1971. “Oratio XVI”, p. 406, « *Mansit tamen illud[epidicticon], ut qui bene, id est, tum diserte, tum prudenter et ad res, ad personas, ad tempora accommodate epistolam scribunt, facillime ad intimam principum familiaritatem perveniant et ad maximarum rerum tractationem adhibeantur, maximis plerumque honoribus augeantur.* » 「たしかに演説弁論というのが残っているにしても、巧みに、思慮深く、そして話題や性格、状況に適した手紙を書くことができる人間は、容易に君主と親密な関係になることができ、最重要の事柄に参加し、次第に名誉を大きくするのだ」。

(48) Ronald Witt, « Medieval “Ars Dictaminis” and the Beginnings of Humanisme : a New Construction of the Problem », in *Renaissance Quarterly*, vol. 35, n. 1, 1982, pp. 1-35.

(49) ルネサンスのレトリックにおける「親密さ」については Kathy Eden, *op. cit.*

(50) Chomarar, *op. cit.*, pp. 1003-1038; J. Rice-Henderson, « Erasmus on the Art of Letter-Writing », in *Renaissance Eloquence*, ed. J. Murphy, University of California Press, 1983, pp. 331-355; *id.*, « Tradition and Innovation in Erasmus’ Epistolary Theory : A Reconsideration », in *ERSY* 29, Brill, 2009, pp. 23-59.

の序文において、書簡とは日々の取るに足らない、しかし楽しい友人とのおしゃべりであると説明し、簡潔で、即興的、気取りのない文体が書簡には相応しいと述べる。そしてなによりも、書き手の精神と肉体の状態が反映される媒体であると定義づける⁵¹⁾。つまり、エラスムスが主張した人格的適正は書簡において実現されるのだ。

*Detegimur enim in epistolis, et subiicimur oculis paene nudi. Nosse me, aut alium vis? Epistolas lege, quae depingunt. Ingenii mei, adfectus, iudicii, imo et uitae non uana imago istic. Alibi fucus et simulatio habitat, hic candor, hic ueritas, et non nisi natiuus ille color*⁵²⁾.

私は手紙のなかに自分の姿を見出し、それをほとんど裸の状態で目の前に置きます。私か、もしくは他の人を知りたいですって。手紙を読んでください。そこに描かれていますから。私の性格、情念、判断そして生活、というよりむしろありのままの姿がそこにあります。他のところには虚飾とごまかしがありますが、ここには誠実、真実、そしてまったく自然の肌の色合いがあります。

書き手の精神の反映を重視する「言論は魂の鏡 *oratio speculum animi*」の思想は、雄弁の衰退にともなって、書簡というジャンルの正当性を支える根幹へと姿を変えた。ジャンルが変われば、当然その規範となる著作家も変わる。いまやキケロは絶対的な存在ではない。

1591年『書簡教程』

リプシウスは弁論と書簡を明確に区別し、独立したジャンルとして扱う。それにより書簡は、もはや会話の延長ではなく、思索と孤独の象徴としての立ち位置を得る⁵³⁾。憂鬱症と心気症に悩まされたこの博識な文献学者にとって、書簡は自分自身を表現するのうってつけの手段であった。リプシウスの反キケロ主義と思想形成についての研究はすでになされているが⁵⁴⁾、彼の立場はキケロを拒絶するものではないさきかもない。彼の関心はむしろ新たな規範の探求、新たな価値観の創出に向けられており、その一環として三段階の模倣が語られる。第一に、キケロを模倣し、ラテン語の正確さと明瞭さを身に着けること。そして次にはキケロ文体で手紙を書いたルネサンスの著作家たちを模倣し、そのあと、重厚でない作家、カエサルやリウィウス、クインティリアヌスなどを真似る。こうしたラテン語の基礎が出来上がったあとは、プラウトゥスやテレンティウスなどの教室向きではない作家を模倣し、文体の柔軟性を養うのがよい。そして最後には、サルスティウスやセネカ、タキトゥスといった、力強く、簡素で、男らしい文体を持った作家を模倣するべきだと説かれる。リプシウスはキケロを模倣の第一段階、いわば基礎に置くことによって、伝統的な模倣の問題とみずからのラテン白銀期

51) *Epistolarum selectarum centuria prima miscellanea*, Leiden, C. Plantin, 1586, “Lectorem meum”, « *Languent enim illae [=meas litteras], excitantur, dolent, gaudent; calent, frigent mecum. Vi verbo dicam, affectus animi corporisque mei in hac tabella.* » 「というのも、手紙は私自身とともに憔悴したり興奮したり、悩んだり楽しんだり、熱くなったり冷たくなったりするからだ。いくなれば、私の魂と身体の様子がこの絵にあらわれているのだ」。

52) *Ibid.* また、この序文と『エッセー』の「読者に」の類似については Michel Magnien, « Montaigne et Juste Lipse : une double méprise ? », in *Juste Lipse (1547-1606) en son temps, actes du colloque de Strasbourg, 1994*, réunis par Ch. Mouchel, Paris, Honoré Champion, 1996, p. 443 の指摘がある。

53) E. Catherine Dunn, « Lipsius and the Art of Letter-Writing », in *Studies in the Renaissance*, vol. 3, 1956, pp. 145-156; M. Fumaroli, « Genèse de l'épistolographie classique : rhétorique humaniste de la lettre, de Pétrarque à Juste Lipse », in *Revue d'Histoire Littéraire de la France*, nov.-déc., 1978, n. 6, pp. 886-905; *id.*, *op. cit.*, pp. 152-158; M. Morford, « Life and Letters in Lipsius's Teaching », in *Iustus Lipsius, europae lumen et columen : Proceedings of the International Colloquium Leuven 17-19 September 1997*, eds. G. Tournoy, J. De Landtsheer and J. Papy, Leuven University Press, 1999, pp. 107-123; R. V. Young, « Lipsius and imitatio as educational teaching », in *ibid.*, pp. 269-280. 羅英対訳本は *Principles of Letter-Writing: A Bilingual Text of "Justi Lipsi Epistolica Institutio"*, ed. and trans. by Robert V. Young and M. Thomas Hester, Carbondale-Edwardsville, Southern Illinois University Press, 1996.

54) 代表的なのが、M. Croll, « Juste Lipse et le Mouvement Anticicéronien à la Fin du XVI^e et au Début du XVII^e siècle », dans *op. cit.*, pp. 7-44.

の偏愛に上手く折り合いをつけている。かつて絶対的な優位性を持ったキケロの散文は、いまやラテン語を学び始めるものが模倣すべきお手本になったのだ。キケロの文体の価値について議論する時代は過ぎた。その価値は自明であり、十分な権威を持っているので、むしろ誰しもが最初に学ぶべき著者である⁶⁵⁾。より重要なのは、タキトゥスやセネカが代表する「簡潔さ」を備えた著者たちを模倣し、その教えを学ぶことである。このリプシウスの見方は、彼個人のものであると同時に、時代を色濃く反映したものである。雄弁を体現していたキケロから、時代はラテン白銀期の作家たちへと視線を移す。これこそが十六世紀後半に起きたレトリックの変化である。

十六世紀はキケロ主義の世紀であり、人々は多かれ少なかれキケロ主義者であった。キケロを崇拜するにしても、反発するにしても、キケロの散文はいずれにせよ共通の文化的基盤であり、そこには一般的な了解があった。ただ、エラスムスがイタリアの傲慢さに向けて放った一撃は、本人の意図を超え多くの問題に波及した。これ以降、レトリックは、キケロという価値の相対化と新たな模範の探求へと向かう。もとはといえばイタリアにおいてキケロが再発見、再評価されたことから生まれたルネサンスが、成熟するにともなって当初の熱が冷め、落ち着いて偉大な古典作品たちに向き合えるようになったというべきかもしれない。いずれにせよ、その変化が顕在化する引き金となったのは1528年の『キケロ主義者』であり、その後のレトリックを考えるにあたって常に振り返るべき年であるのはまちがいない。

⁶⁵⁾ リプシウスのキケロに対する態度は、次の二つを参照。Alain Michel, « Cicéron chez Juste Lipse : le stoïcisme, l'élégance et le sens de la douleur », in *Juste Lipse (1547-1606) en son temps*, éd. C. Mouchel, Paris, Champion, 1996, pp. 19-30 ; J.-M. Chatelain, « Juste Lipse cicéronien : rhétorique et politique de l'éloge du cardinal de Granvelle dans les *Variae lectiones* », *ibid.*, pp. 455-470.